

芥川龍之介

蜘蛛の糸



蜘蛛の糸

一

或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになっていらっしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊ずいからは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御佇おたみになったず、水

の面おもてを蔽おほっている蓮の葉の間から、ふと下の容子ようすを御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当あって居ゐりますから、水晶のような水を透すき徹てつして、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度覗のぞき眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多かんだたと云う男が一人、外ほかの罪人と一しよに蠢うごめめいてゐる姿が、御眼に止とまりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家いへに火ひをつけたり、いろいろ悪事を働こいた大泥坊おどろでございしますが、それでもたった一つ、善い事を致いたした覚えがございします。と申し

ますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無暗むやみにとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございませう。

御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報むくいには、出来る

なら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。さいわい幸、側を見ますと、翡翠ひすいのような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮しらばすの間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下おろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しよに、

浮いたり沈んだりしていた犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗やみからぼんやり浮き上っているものがあると思えますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云ったらございませぬ。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞えるものと云っては、唯罪人がつくかすか微ためいきな嘆息ばかりでございます。これはここへ落ちて来る程の人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れはてて、泣声を出す力さえなくなっているのをございましょう。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やは

り血の池の血に咽むせびながら、まるで死にかかった蛙かわずのように、唯もがいてばかり居りました。

ところが、ある時の事でございます。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗やみの中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございませんか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍うって喜びました。この糸に縋すがりついて、どこまでもものぼって行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ちがいませぬ。

いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ましよう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思いましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございますから、こう云う事には昔から、慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございませから、いくら焦あせって見た所で、容易に上へは出られませ

ん。稍ややしばらくのぼる中うちに、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまいました。そこで仕方がございませんから、先まづ一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼつた甲斐があつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗やみの底に何時いつの間にかかくれて居ります。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になつてしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけが

ないかも知れません。犍陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。所がふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、かずかぎり数限もない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、しばらくは唯、ぼか莫迦のように大きな口を開いた儘、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうきな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重

みに堪える事が出来ましよう。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼって来たこの肝腎かんじんな自分までも、元の地獄へ逆落さかおとしに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大變でございます。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなれば、糸はまん中から二つに断きれて、落ちてしまふのに違いありません。そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。

この蜘蛛の糸は己おれのものだぞ。お前たちは一体誰たれに尋たずいて、のぼって来た。下りろ。下りろ。」と喚わめきました。

その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて断れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云う間もなく風を切つて、独こ楽まのようにくるくるまわりながら、見る見る中に暗やみの底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。

後には唯極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりで

ございます。

三

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしましますと、悲しそうな御顔をなさりながら、又ぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地

獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、
 浅間しく思召おぼしめされたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致
 しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足おみあしの
 まわりに、ゆらゆらうてな萼を動かして、そのまん中にある
 金色の蕊ずいからは、何とも云えない好い匂ひるが、絶間なくあ
 たりへ溢れて居ります。極楽ももう午ひるに近くなつたので
 ございましょう。

(大正七年四月)

日本文学電子図書館

蜘蛛の糸

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文学大系43 芥川龍之介集
筑摩書房

昭和43年8月25日 初版第一刷発行



日本文学電子図書館